

# 算命学中庸

## 【初年】 18回目

18回目の授業はこのページからです。

### 授業科目 【十二支盤の陰陽】

【初年】 18回目【十二支盤の陰陽】 01

十二支盤の陰陽は十二支盤を四分分割して、季節の十二支をみます。

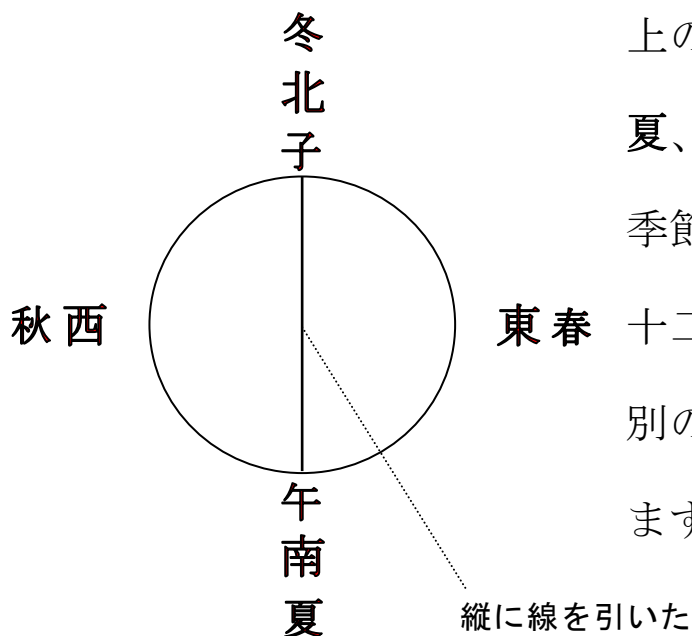
〔たとえば〕 北方の十二支は（<sup>ほっぼう</sup>亥子丑）の三支です。

これら（三支）は冬の十二支でもあるわけです。

十二支盤の陰陽をみるには、やはり十二支盤を分けます。

段階的にやっていきますけど……ご理解を高めるためにノートなどに十二支盤を書くときよいでしょう。

**宿命(1)十二支盤** ← 説明を理解しやすくするための(番号)です。



上の(子)のところは冬、下方は夏、向かって左は秋です。

季節を春夏秋冬の4つに分けて、十二支盤を見ますが、それとは別の考え方も、十二支に存在します。

ご存じのように、十二支には方角も決まっています。

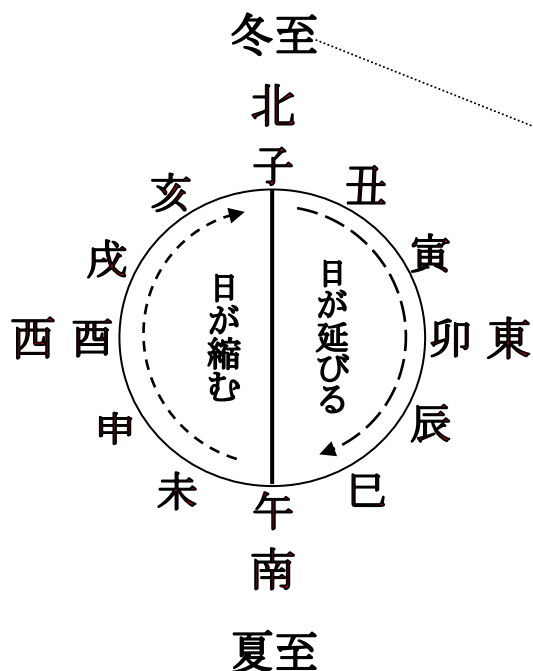
上が北で、下が南、向かって右は東、左は西です。

私たちが使用している地図の東西南北とおなじです。

十二支に季節に当てはめたり、東西南北に当てはめたりして、十二支盤を自然界に置き換えて、十二支それぞれの姿を考えます。

そうしますと、**宿命(1)十二支盤**のように、十二支盤のなかで、(子)と(午)を結ぶようにして、縦に線を引いて、右半分と、左半分とに分けます。

宿命（2）十二支盤・冬至／夏至



そうしますと、季節を考えれば、(子)のところに冬至とうじがあります。冬至のところから、日ひが延び始めます。

春から夏にかけて、十二支（寅卯辰……）というようにどんどん日ひが延び続けます。

午まで来ると夏至げしがあります。

夏至は昼が一番長い日です。

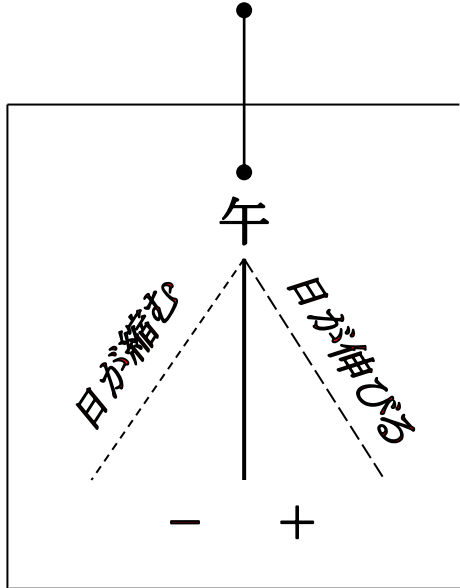
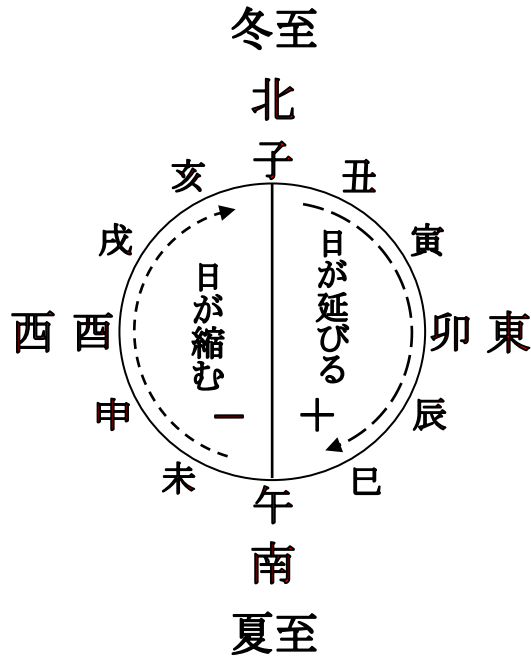
そして、夏至からは、日ひが縮ちぢみはじめます。

（午未申酉……）と、日ひがどんどん短くなります。

縦に線を引いた、右半分は日ひが延びていくところでは。

左半分は日ひが縮ちぢんでいくところ、ということになります。

宿命 (3) 十二支盤・日照時間



この図は……

(午) を境にして十二支盤を、  
 右半分と左半分に分けました。  
 そうしますと、(午) を境にして  
 日が延びるのは〔+ の右半分〕  
 (午) を境にして、日が縮むのは  
 〔- の左半分〕です。

宿命 (3) 十二支盤・日照時間

のように、(子) から (午) に向  
 かって、日ひが昇り始めて、(子丑寅卯辰巳) まで、日ひが延び  
 続けます。逆に (午) からは、日が縮んでいきます。

**宿命(3) 十二支盤・日照時間** のように、

日が伸びていく〔上り坂のところを+〕とします。

そして今度は、日ひが（午）からは縮んでいきます。

縮んでいくということは……下り坂です。

太陽がドンドン弱くなっていきます。

それゆえに〔下り坂のところを-〕とします。

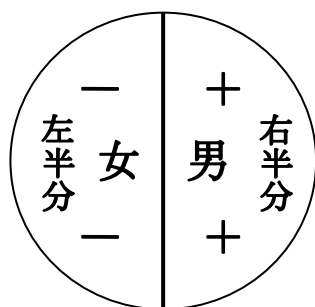
『気』の世界ということで、物事を〔上り坂のぼ〕〔下り坂くだ〕  
とに分けたときに、陰陽論でいえば、上り坂を〔陽+よう〕  
として考えます。下り坂を〔陰-いん〕として考えます。

自然界でも、活気がドンドン出始めて来る〔+陽の場所〕  
がありますし、逆に……日ひがドンドン縮んでいって、活気  
が衰えて行く〔-陰の場所〕もあります。

太陽の日照時間が変わり行く姿を、十二支盤で表すと、  
どのようになるのでしょうか……。なるべく私とおなじように、  
ノートなどに書いてみると勉強になります。

つぎのページ **宿命(4) 十二支盤・左半分／右半分** からはじめます。

宿命（4）十二支盤・左半分／右半分



十二支盤を、左半分と右半分に  
分けると、〔左半分 ー〕の場所、  
〔右半分 十〕の場所になります。  
……なるべく、私とおなじよう空間を  
取るように書くとよいですね。

十二支盤の〔左半分はー〕〔右半分は十〕と考えます。

女の場所は〔左半分 ー〕      男の場所は〔右半分 十〕

☞ 人間に当てはめれば〔女はー〕〔男は十〕です。

それゆえに、女の場所はーで、左半分です。

男の場所は十で、右半分です。

十二支盤をこのように分ける見方があります。

このように分けましたが……この分け方を一旦<sup>いったん</sup>忘れてください。

☞ 今度は **宿命（5）十二支盤・太陽のうごき** です。

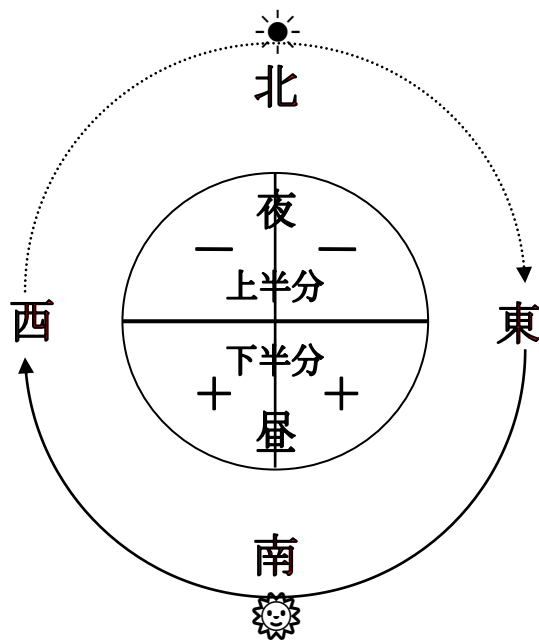
あら <sup>なが</sup> 新たな気持ちで、十二支盤を眺めてください。

そうしますと、今度は横線を引いて見ましょう。

十二支盤の中央に横線を引きました。そうしますと……

**宿命（5）十二支盤・太陽のうごき** のように、上半分と下半分に分けることができます。

この十二支盤に（1日<sup>にち</sup>24時間）を当てはめて考えます。



**宿命（5）十二支盤・太陽のうごき**

十二支盤に、方角の東西南北を位置づけると……太陽は朝・東から昇って来ます。

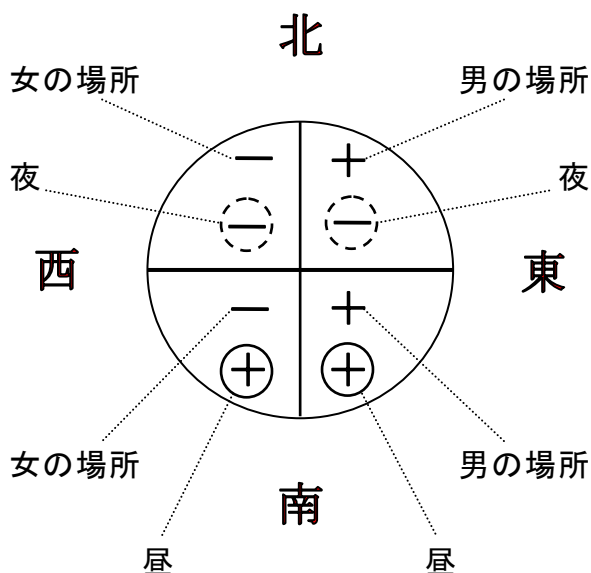
東から昇って、お昼になると、太陽は南<sup>かた</sup>の方へ昇って来ます。

正午<sup>しょうご</sup>になると太陽は真南<sup>まみなみ</sup>（南中<sup>なんちゆう</sup>）に来て、南中を過ぎると西へ傾いて西方へ沈みます。西に沈んだ後<sup>あと</sup>、地球の裏側をズット通り続け、また東から昇ってきます。十二支盤に1日を当てはめると、太陽の動きはこのようにいえます。

そうしますと、十二支盤を（1日）に見立てたとき……

上半分と下半分を陰陽に分けると《上半分は夜<sup>いん</sup>で陰 -》になります。《下半分は昼<sup>よう</sup>で陽 +》になります。

宿命（6）十二支盤・夜と昼



宿命（4）十二支盤・左半分／右半分

に書きましたように、

女の場所は〔左半分〕です。

男の場所は〔右半分〕です。

女の場所〔左半分 - 〕

男の場所〔右半分 + 〕

{上半分 ( - ) 夜}

{下半分 ( + ) 昼}

太陽は東から昇って、南を通過して、西へ沈んでいきます。

宿命（5）十二支盤・太陽のうごき でわかるように、下半分は

ズート太陽が出ている時間帯なので {下半分は昼 ( + ) } になります。

そして、太陽が西に沈んだ後も、地球の裏側をズート通り続けて、また、東から昇ってきます。



そうしますと、十二支盤の上半分・地球の裏側は、太陽が出ていない時間帯になるので、{上半分は夜(☾)} になります。

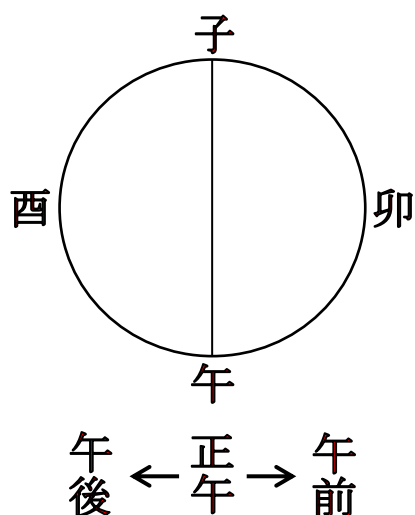
☞ 余談ですけど……。

太陽が東から昇って、南を通過して、西に沈みますけど、  
まみなみ  
真南に来たときが、お昼の12時です。

十二支では、ちょうど(午)のところに太陽が来た、と  
いうことで、お昼の12時をしょうご  
正午といいます。

しょうご  
正午を境にして、十二支の午の前が午前になります。

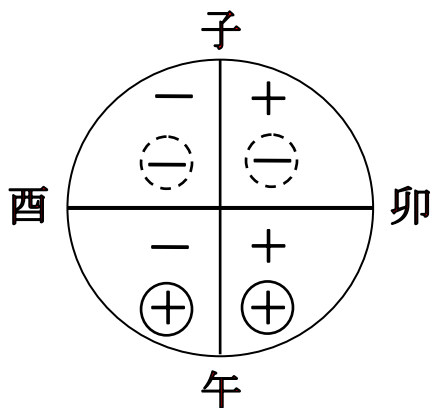
うま あと  
十二支の午の後が午後になります。



宿命 (7) 正午とは……

☞ 話をもどします。

宿命（8）十二支盤・夜／昼

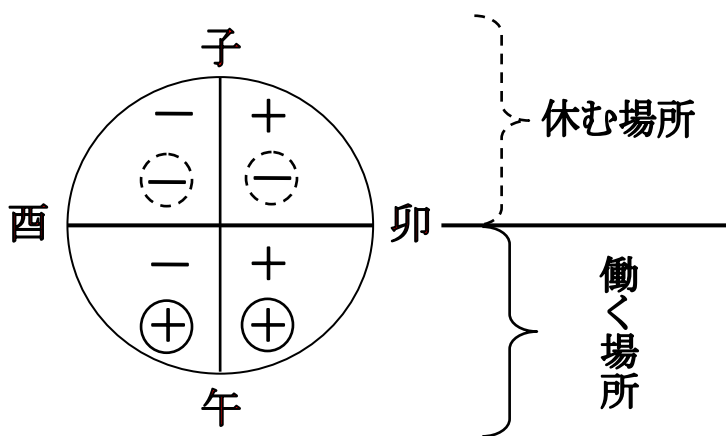


上半分は夜だから (⊖) の場所

下半分は昼だから (⊕) の場所

宿命（9）十二支盤・休む場所／働く場所

《上半分は夜》ですから、人間に置き換えていえば……  
夜は就寝の時間帯なので《休む場所》です。



昼は活動する時間帯なので《働く場所》です。

{ 上半分 (⊖) 夜 } 休む場所

{ 下半分 (⊕) 昼 } 働く場所

こういう意味合いがあります

☞ 復習をしてみますと：

最初は十二支盤に縦に線を引いて、右半分と左半分に分  
けました。

そうしますと、女の場所〔左半分が－〕です。

男の場所〔右半分が＋〕です。

その分け方とは、全く別に：

今度は、横に線を引いて、上半分と下半分に分けます。

そうしますと、{上が夜} で、{下が昼} になります。

{上は夜} 休む場所になります。

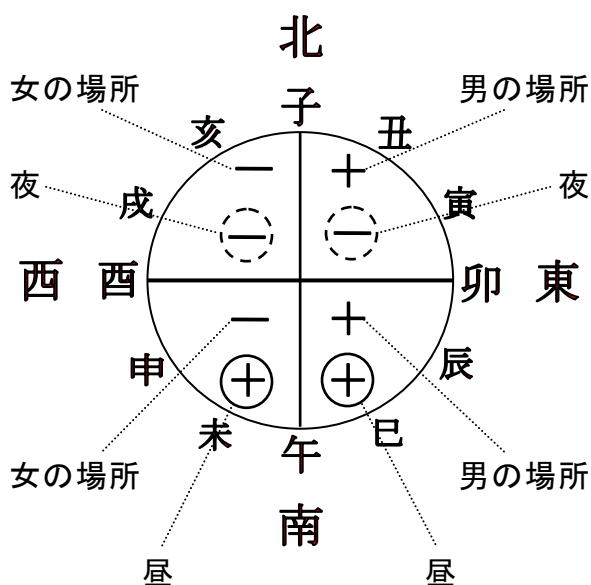
{下は昼} 働く場所になります。

というふうに、十二支盤を陰<sup>いん</sup>と陽<sup>よう</sup>に二分しました。

この姿は結果的に、十二支盤が4つの場所に区切られた  
わけです。 ➡

この姿は結果的に、十二支盤が4つの場所に区切られたわけです。  
この姿をつかいますと、簡単な占いができます。

宿命（10）かんたん占い



(子丑寅) のあるところは {右半分で男の場所} です。  
そして、{上半分の夜} は休む場所です。  
そうすると、(子丑寅) は『男の休む場所』ということになります。  
もし……宿命に (子丑寅) が多いという人は、休んでばかりいる男です。となるわけです。  
(卯辰巳) は『男の働く場所』になりますから、(卯辰巳) が宿命にいくつもある人だとすれば、働き者の男です。

ということになるわけです。

(午未申) は『女の働く場所』です。

(酉戌亥) は『女の休む場所』です。

まとめてみますと：宿命(11) 4つの領域

(子丑寅) ⇒ 休む男

(卯辰巳) ⇒ 働く男

(午未申) ⇒ 働く女

(酉戌亥) ⇒ 休む女

誰でも宿命には、十二支を3つもっていますから、その3つを当てはめるわけです。十二支盤の4つの場所のなかで、何処に一番多く該当しているのかによって、そういう特徴を備えますよ。と、いうふうに考えるわけです。

男でも(酉戌亥)が、たくさんある人もいます。男でそれらの(支)が多ければ「男だけど女性的な質の人で、休んでばかりいる人のようだ」と観るわけですがこの「休む」というのは、誤解しやすい部分でもあります。そこで例題を用いて説明を加えながら考えていきます。

✽ 田中真紀子 1944(s19)-1-8 宿命 (12) 田中真紀子

	丁 乙 癸		車騎星	天南星	8 丙寅
申	丑 丑 未		車騎星	車騎星	18 丁卯
酉	癸 癸 丁		天庫星	龍高星	28 戊辰
	辛 辛 乙				38 己巳
	己 己 己				48 庚午
					58 辛未
					68 壬申

✽ 田中直紀 1940(s15)-6-19 宿命 (13) 田中直紀

	癸 壬 庚		玉堂星	天印星	6 癸未
午	巳 午 辰		玉堂星	車騎星	16 甲申
未	戊 乙		天報星	石門星	26 乙酉
	庚 己 癸				36 丙戌
	丙 丁 戊				46 丁亥
					56 戊子
					67 己丑
					76 庚寅

宿命（14）田中眞紀子

丁 乙 癸 田中眞紀子さんの宿命の地支には、(丑)  
① ② 未 が2あって、その2つが(子丑寅)の区域  
休む男  
にある十二支です。これは休む男です。

この宿命のように、2つともが、どれかの区域にスッポリ入ってしまうのも珍しいです。

このように、どの区域内に、一番該当しているのかで、分けてください。

宿命（15）田中直紀

癸 壬 庚 田中直紀さんは、どれが多いですか？  
③ ④ ⑤ (辰) と (巳) は、2つとも働く男です。  
働く男

そうしますと、休む男と働く男が結婚しているわけです。2人の姿は、その通りの意味合いが当てはまりますが、田中眞紀子さんは女性ですけど、〔男性的な性質を備えた人である〕とまずは考えます。

さきほど、田中真紀子さんについて“これは休む男です”という言い方をしました。その“休む男”の意味合いは、誤解しやすいところでもあるのです。

自分が休むためには、どうすればよいのでしょうか……？

端的に言えば、相手の人・周囲の人を働かせればいいですね。

「貴方はこれやりなさい」「貴方こっちをやって」と命令する・指図する、とかであれば自分は休めます。

そうしますと“休む男”の区域にある十二支が多い人は、男みたいな人で、命令ばかりしている人になる可能性があります。という意味が横たわっています。

休むというのは ⇒ 人に命令する（良い悪いは論じていません）

宿命（16）田中真紀子

丁 乙 癸 自分は働かないで、あれやってこれやって  
⊙ 丑 ⊙ 辰 そうなる可能性があるということです。  
休む男 → 人に命令する  
これは休む男です。

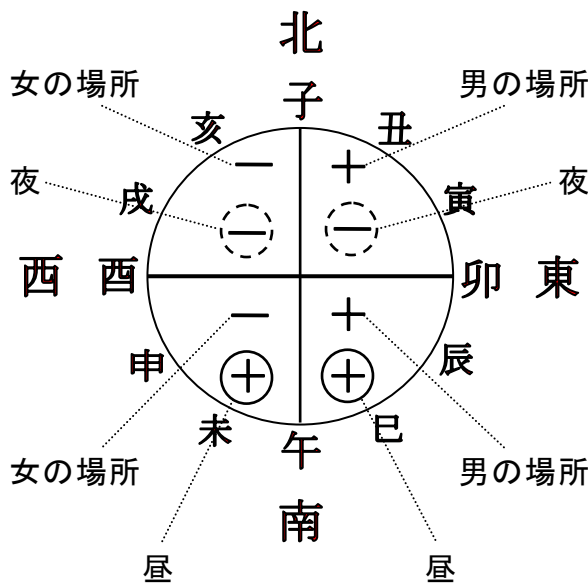
《上半分は休む場所》方角は北です。

昔から、将軍とか天皇とか、偉い人は『北』に住居があります。

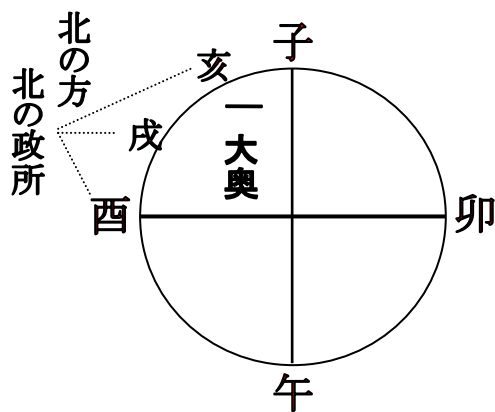


☞ 下記の十二支盤は、家相の基<sup>もと</sup>になる考え方でもあり  
 休む場所が多い人は、方角でいえば、北の十二支が多い  
 わけです。

宿命（17）家相の考え方のひとつ



宿命（18）酉・戌・亥



宿命の話とは別ですが、家相では  
 天皇とか、将軍・殿様とか、偉い  
 は、北に城を造る、御所を建てたり  
 しています。

古来……高貴な人物の奥方を「北の方」「北の政所」とか呼称<sup>きた かた きた まんどころ こしょう</sup>

しますが、北側に居住していたゆえんです。

江戸城においても、南から家来が入ってきて、一番北方きたかたに將軍様が居住するようになっています。

大奥は江戸城のなか（酉 戌 亥）の方角です。

十二支盤でいえば、女の住む場所一に位置していました。

そこには「休む(☯)」という意味合いも含まれています

⇒ 真紀子さんの夫（田中直紀）を観ますと、働く男ということでした。

普通は「まめな男性で色々やってくれる男性ですね」というふうに占ってよいのですが……この2人の組み合わせは、妻が夫に命令を下して休みます。夫をその指令に従って、働かされてしまう。というような姿になる……といっても過言ではないのです。

このご夫婦はその姿が合っていたのかも知れないです。

直紀さんは婿養子ですから、イヤイヤでも働かなくてはならないでしょうし、宿命もそれに合っていますから、よろしいでしょう。

しかし、婿養子で休む男だとすれば向かないわけです。  
このご夫婦の場合は、適合しているといえます。

……つぎのようなこともあります。

宿命に休む場所が多い人でありながら、人に命令できないとか、強くでられない、そういう人もいるでしょう。  
その人物は、休む十二支が多いのに、まわりに対して、命令するのを躊躇するとか、できないとか、それなのに自分は休みたいとなると、どうなるのでしょうか……？

### 人に頼る

命令できないので、人に「これやってください」「何とか助けてください」というふうに、お願いしたりするとかの可能性もあります。

これは置かれた立場によって異なります。

真紀子さんのような宿命で、田中家の長女に生まれたのであれば、命令するほうになるでしょう。(必ずなるとはいえません) ……真紀子さんと比べて、家柄が良くないとか、彼女ほどの権力もない、というような立場の人だとすれば、「人に頼る」という人物になる可能性があります。

“休む”の考え方としては：

### 落ちつきがある

こういう出方になる場合もあります。

それゆえに“怠け者”と決めつけるのではなくて——、性格的に落ち着いている、少々の事には動じない、慌てあわないとか、そういうタイプの人になる場合もあります。

どのようになって行くのかは、人それぞれといえます。

そうしますと、“休む”十二支が多いからといって、それが悪いほうの結果を生むとは、決まっていないのです。

宿命を見たときに、休む場所が多い人であっても、さまざまな事象に対して、沈着ちんちやくで立派な態度・行動で応えるこた人もいます。

☞ 自分は動こうとしないで、命令ばかりして、威張あわっている人もいます。

☞ 自分が困ったときに、まわりの人ばかりに頼って、だらしなくなる人もいます。

どれに出るのかは——なかなか判断できないのです。

真紀子さんは、直紀さんと結婚したことで、彼女に内在されていた本来の質が湧き出たといえます。

彼女のような宿命に、入り婿したわけですから、余計そうなるであろう……と観ていくことはできます。

真紀子さんが、まったく別の宿命の男性と結婚していたとすれば、(相手の宿命によりますけど) ああまで、我が儘にはならなかった。ともいえるわけです。

☞ 鑑定するときには、その一人の宿命だけを観て、想定することはできるわけですが、人間関係ですから、相手があります。それゆえに、お客様の相談内容をよくお聞することが重要です。

そして、その舞台に登場してくる人たちの宿命を観ることが<sup>ようてい</sup>要諦になるわけです。

算命学は登場人物が何人いても、つまり多数いても——なんの問題もないのです。算命学は集団の占いです。算命学は複数の人物をまとめて対応できる占学です。

＊ 古賀潤一郎 1944(s33)-3-22

宿命（19）古賀潤一郎

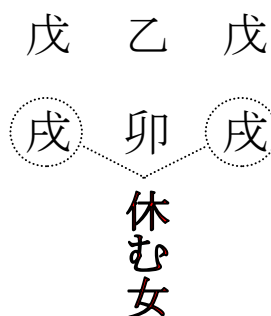
	戊	乙	戊		貫索星	天庫星	5	丙辰
辰	戊	卯	戊	貫索星	牽牛星	貫索星	15	丁巳
巳	辛		辛	天庫星	牽牛星	天恍星	25	戊午
	丁		丁				35	己未
	戊	乙	戊				45	庚申
							55	辛酉
							66	壬戌

1955(H7)「乙未」福岡県議会議員・初当選

2003(H15)「癸未」第43回衆議院議員選挙で山崎拓を破り当選。

UCLA 留学とかの学歴詐称で、2004「庚申」民主党除籍処分。

宿命（20）休む女



この人物は（戌）が2つありますから、  
女性で休む場所が多い人です。休む女

休む女が悪いとかではなくて、それが特徴です。

宿命にそう書いてありますから、その通りに生きたほうがよいですね。ということになります。

この宿命の人が、自分は男らしくて行動的だとか、格好よく他人に見せようとする<sup>ひと</sup>と、失敗の原因になります。古賀さんは、学歴詐称で叩かれたわけですが、その根本には、男らしい人間だと誇示したいという思いがあったといえます。プロテニスというのも疑惑になっていましたから“カッコつけ過ぎた”ということです。

女の場所は〔陰 一の場所〕ですから、目立とうとしないで、陰<sup>かげ</sup>で相手を支えるとか……陰で組織を支えるとか、裏で汗を流すようにしたほうが、持ち味が出るのです。

目立つ、目立たないを、陰陽<sup>いんよう</sup>でいえば、陽は主体性があるので目立ちます。

陰は主体性がないので、目立たないわけです。

陽の多い人は、目立つようにやるのが持ち味です。

陰の多い人は、目立たないようにやるのが持ち味です。

もし、各領域の十二支が 1 つずつで、どれが多いといえない宿命の場合は〔領域の特徴は別段に無い〕と思ってください。つまりそれぞれ少しずつもっています。ということになります。参照⇒ 宿命 (1 1) 4つの領域

☞ 先ほど、家相の基もとになる考え方でもあり……といいましたように、古来……日本の偉い人物の代表としては、天皇とか将軍ですが、その人物は自分が働く必要がありませんから、北に部屋を造ったわけです。

参照⇒ 宿命（17）家相の考え方のひとつ 宿命（18）酉・戌・亥

昔の京都の町「平安京」などは、町全体がその姿を基にして造られている。といわれています。

平安京の時代は、平安京の北方きたかたに大内裏だいだり（諸官庁など）が造られ、大内裏中央の少し東方ひがしかたに、内裏だいら（天皇の御殿）が造られていたようです。

大内裏みなみかたの南方には「京の町」が広がっています。

徳川家康が、江戸幕府を開いたときも、家相の基の考え方に準じて、江戸の町を造ったといわれています。

江戸城は、江戸の町の一番北に位置していました。

江戸城よりも、北の方にほとんど人は住んでいませんでした。江戸城の南の方に家臣を住ませたのです。

みなみ南は働く場所ですから、南に家臣を住ませることで、江戸の南に城下町が広がるように造ったのです。



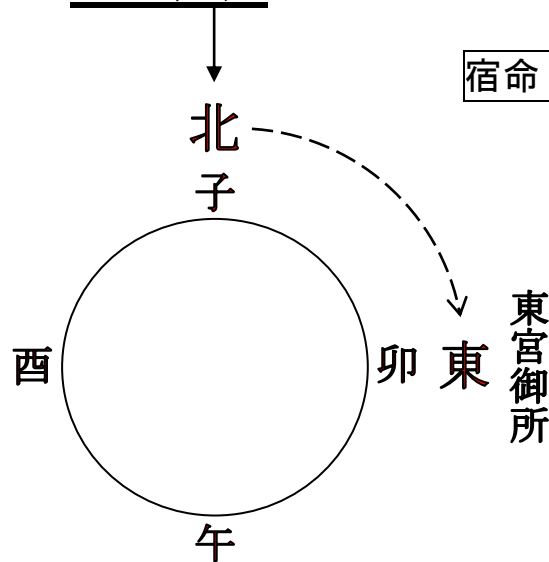
その後——家康が死んだ<sup>のち</sup>後に、人口が増えてきたので、北のほうにも、人が住むようになったわけです。

現在は皇居（昔の江戸城）の北方<sup>きたかた</sup>が発展しているように思えます。江戸時代は皇居よりも南方<sup>みなみかた</sup>が発展していました。当初の造りはそうです。

⇒ 北に家長が住み、南に家来が住みます。

〔後継ぎ〕が住むのはどの場所でしょう。江戸時代であれば次の将軍です。現在は皇太子<sup>いま</sup>になります。

太陽がこの位置にいたら……つぎに来るのは東です。



つぎの時代<sup>にな</sup>を担う跡継ぎは東に住めばよいわけです。

現在<sup>いま</sup>でも皇太子殿下が住んでいたところを東宮御所といいます。天皇の住居（皇居）の

東に皇太子が居住し、東宮御所というようになったそうです。

現在・皇太子が住んでいるのは、皇居の東方<sup>ひがしかた</sup>ではありません。

東には造れずに、呼び方だけが残り、東宮御所とっています。

皆さまも、家を建てるとか、立て直すとかがあったら、自分（=妻）の部屋を北に造って、子供部屋を東に造り、夫を南に住まわせたりすれば、自分が命令して、「ああしなさい、こうしなさい」と、いう立場になれるかも……です。それがよいかどうかは別の話です。そういう「気」が加わると考えてください。

☞【初年】 18回目【十二支盤の陰陽】 17頁 と 24頁 において、  
「下記の十二支盤は、家相の基<sup>もとい</sup>になる考え方でもあり」と申しあげましたが、算命学は宿命の観方・宿命自体のほうが重要だと考えています。

宿命を観て、どの干支が多いとか、少ないとか、そして宿命全体の流れ・運勢のうごきを観る。それらの事象のほうが重要だと考えています。

それを前提にして、家相を観るのもよろしいでしょう。

そもそも……子供を世継ぎ、後継ぎにしたいとか、<sup>ひがしかた</sup>東方に住まわせよう、とか思っても、その子供の宿命自体が、後継者に向いている宿命なのかどうかを、まずは観ないといけないわけです。そちらのほうが重要なのです。

そのうえで、後継者に向いているのであれば、東側にその子供の部屋を造るといいですね……という、つぎの話になるわけです。

もっとも重要・大切なのは、その子供の宿命です。

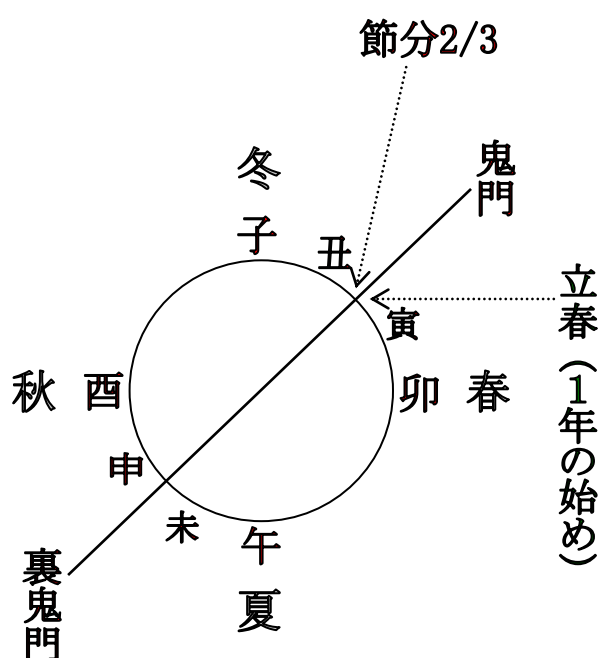
〔親に縁のない子供〕もいれば、〔家系そのものに縁のない子供〕もいます。

また、親そのものに〔子供と縁のない親〕もいるわけです。

それらの事柄は、宿命を観て判断することになります。

まずは宿命ありきです。

⇒ 鬼門について……。



**宿命 (22) 鬼門**

(丑) と (寅) のあいだと  
反対側の (未) と (申)  
のあいだに、線を引くと  
鬼門と裏鬼門に通る線が  
できます。

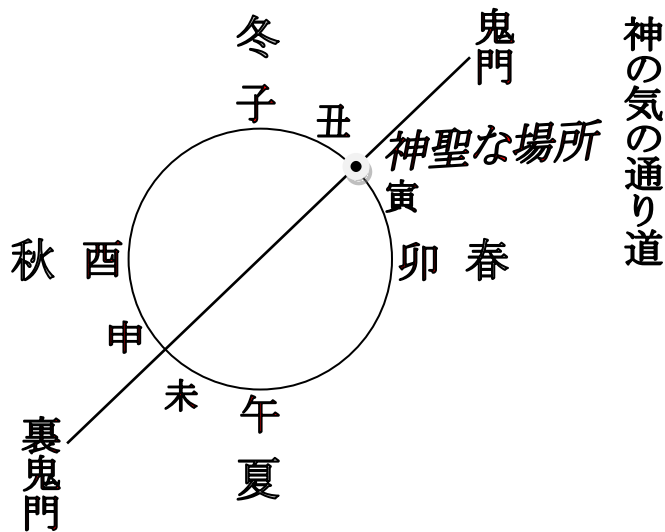
丑寅の方角を“鬼門”といい、未申の方角を“裏鬼門”と呼んで  
ています。

鬼門というのは、(丑) と (寅) のあいだ、冬と春の境目  
の場所で、節分と立春があるところです。

こよみ  
暦でいえば、その場所は立春です。新しい気が生まれる  
ところです。1年が始まるところです。

※ 鬼門に幅があるとか (レールの幅だとか) という方もいるよう  
ですが、鬼門はあくまでも「線」です。幅は無いのです。

## 宿命（23）神聖な線・神の気の通り道



鬼門は「神聖な場所・線」「神の気の通り道」という意味があります。

それゆえに、鬼門の通る方角にトイレを造るとか、流しを設置すれば、せつかく、新しい気が生まれてくるのに、その気を穢けがしてしまうことになる。という意味で、鬼門の方角にトイレなどを、造るのをやめなさい。そういう話になったわけです。

「鬼門は悪い方角だ」という考え方は間違いです。

鬼門は神聖な場所です。

神聖な場所なのだからこそ「不浄なものは、そこには造らないほうが良いですね」という意味が本来の姿です。

ところが、あれを造っちゃいけダメ、これを造っちゃい

けないとか、言っているうちに……おそらく……………

「鬼門」は鬼の門と書くし、縁起が悪そうな名称がつけられているために、鬼門は縁起が悪いとか、悪い方角だとかと、いわれるようになってしまったわけです。

「神聖な場所です」というのが本来の意味です。

また、「神の気の通り道」ともいわれています。

⇒ 徳川家康は関ヶ原の戦いに備え、戦勝祈願に神田明神を参拝しています。

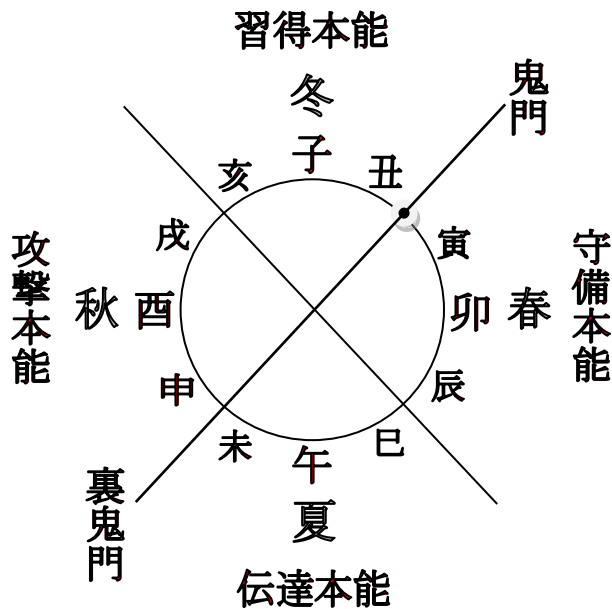
戦勝した家康は神田明神を保護し、1612年（元和2年）に江戸の守り神として、神田明神を現在の場所〔江戸城から北東の表鬼門〕へ遷座して幕府が造営しました。

※ お詫びと訂正です。旧ホームページに、本来「神田明神」であるべきところを成田不動と記載しました。「江戸の守り神は神田明神」が正しいのです。まことに申しわけございません。訂正します。

日光東照宮は東照大権現（徳川家康）を主祭神として祀っています。日光は、江戸から北方に位置し、偉い場所から幕府を見守るということです。

☞ 余談ですけど——桃太郎のお話です。

宿命（24）桃太郎



桃太郎は（十二支）の話です。

桃太郎は、春に生まれるという設定なのです。

「桃の花は春に咲く」その舞台設定なっています。

春に生まれた桃太郎が、夏にかけてズット成長して来て、

『未申の裏鬼門』のところで、鬼退治に出かけます。

鬼退治に出かけた途端に、（猿とキジと犬）を家来として

引き連れますが……（猿とキジと犬）というのは、

十二支の（<sup>さる</sup>申）（<sup>とり</sup>酉）（<sup>いぬ</sup>戌）のことです。

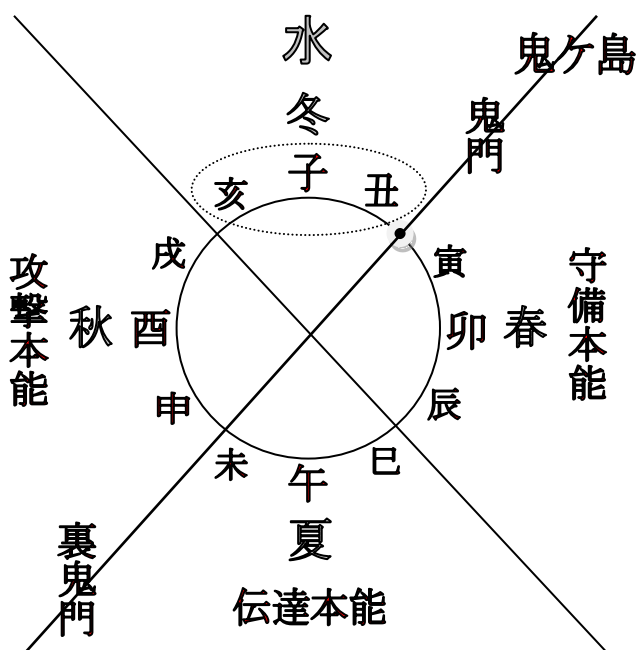
なぜ！（申酉戌）を家来にしたのかといえ、ここは秋の領域です。秋は五行でいえば、金性の気が強い季節です。金性は五本能のなかで“攻撃本能”に相当します。

さるきん とりきん  
 申金も酉金も「戦いの神様」という話をしたと思いますが、十二支でなかでは、攻撃本能を備えて、戦いに向いている十二支です。

それで（<sup>さる</sup>申）（<sup>とり</sup>酉）（<sup>いぬ</sup>戌）の家来を連れて、鬼退治に出かけたわけです。

☞ 目指す鬼ヶ島は……鬼門の方向です。

宿命（25）桃太郎



目指す鬼ヶ島は……鬼門の方角にあり、その途中には、亥水・子水・丑土があり、海・湿地帯を越えないと、鬼ヶ島へ到達できないわけです。そのような舞台設定になっているようです。



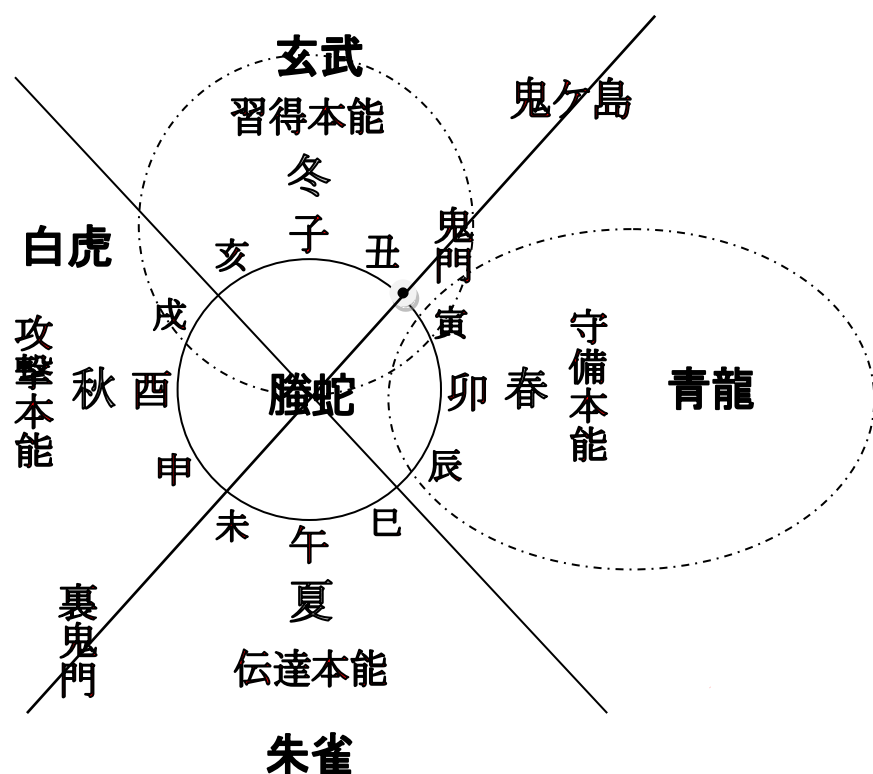
それで、鬼門の鬼ヶ島のところで、鬼を退治すると……  
また、新しい幸運の春がやって来るという話です。

ちなみに——昔は（申酉戌）というだけでなく——、  
十二支の一つ一つに、逸話がついていたともいわれています。

つまり、（未）では桃太郎がどうしたとか、（寅）ではど  
うしたとか、そういうふうな話になっていたそうです。  
しかし、それらはすべて欠落してしまい、このような話  
になったと言われています。

☞ 飛鳥古墳の壁画に算命学でいう「<sup>ごしんじゅう</sup>五神獸」が描かれています。

宿命（26）五神獸



算命学は十二支盤の五方向に、北は玄武・中央は騰蛇・南は朱雀・東は青龍・西は白虎を配置します。

北には玄武という亀に似た架空の生き物、東には青龍という架空の生き物、これらの生き物は神獸です。

桃太郎は猿・雉・犬の家来と共に、鬼門線にある鬼ヶ島を目指すわけです。

冬と春の季節のあいだを通る鬼門線に限っていえば――

玄武と青龍という神獣の保護を受けながら、海や湿地帯という障害・苦難を乗り越えて、鬼ヶ島の鬼を退治して新しい春を迎える……。

というふうな物語かもしれません。

いずれにしても：

鬼門は神聖な場所です。

鬼門線は神の気の通り道です。

という意味があります。

算命学においても、「家相」という考え方がありますので、お伝えすることもあるかとおもいます。

【初年】 18回目【十二支盤の陰陽】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 19回目【十干天性 じっかんてんせい】